

3. 授業改善アンケート調査結果

【2012 年度 前期 授業改善アンケート調査結果】

3-1. 授業改善アンケートの概要（2012 年度 前期）

人間科学研究科では、平成 16 年度より、毎学期末に授業に関して受講生に尋ねるアンケート調査を実施している。平成 22 年度後期より実施方式を大幅に改訂し、全科目を対象に授業内でアンケート用紙を配布・回収する方式から、講義科目のみを対象に、学務情報システム KOAN を利用して Web 上で回答する方式に変更した。質問項目も刷新し、また英文を併記して留学生も回答しやすいようにした。実施期間は以下の通りである。

2012 年度前期アンケート回答期間：平成 24 年 7 月 24 日～8 月 6 日

2012 年度前期アンケート回答期間（集中講義 A）：平成 24 年 8 月 10 日～8 月 12 日

（集中講義 B・C）：平成 24 年 9 月 21 日～10 月 5 日

対象科目数・回答数と科目群ごとの内訳は、以下の通りである。受講登録者数に対する回収率は 32.5%である（なお、受講登録者数は受講者数の実態が反映されたものではない）。

平成 24 年度前期授業改善アンケート対象科目数・回答数

学部			大学院		
	対象 科目数	回答数		対象 科目数	回答数
基礎科目	8	423	共通科目	6	31
共通科目	6	36	先端人間科学科目	2	11
行動系科目	13	113	行動学系科目	9	19
社会系科目	13	128	社会学系科目	7	26
教育系科目	9	110	人間学系科目	6	11
グローバル系科目	12	100	教育学系科目	12	54
			グローバル人間学系科目	14	48
学部計	61	910	大学院計	56	200
計(大学院+学部)				117	1110

回収率：32.5%

回収結果は数値化して集計し、自由記述分も含めて教員にフィードバックされ、個別の授業の改善に役立てられている。さらに、平成 22 年度後期より、アンケート結果がより授業に反映されるよう、担当講師からアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの提出を求めている。

3-2. 授業改善アンケートの結果（2012 年度 前期）

ここでは、平成 24 年度前期の授業改善アンケートの結果を示す。ただし、自由回答項目は除いてある。

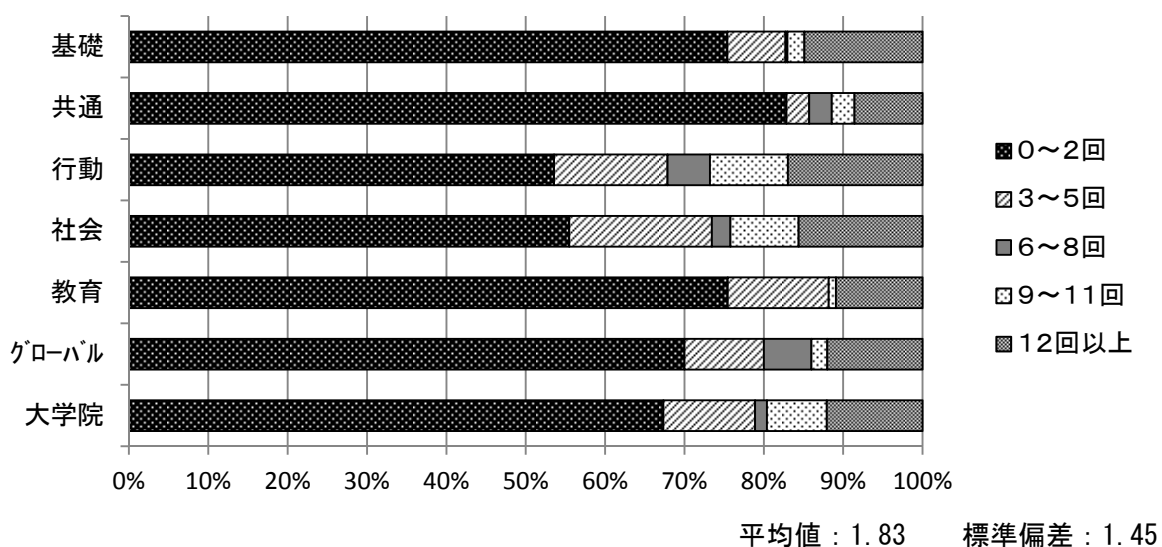
集計は、学部科目については各科目が属するカテゴリーごとに集計を行った。「基礎」は豊中キャンパスで開講される「人間科学概論」等の基礎科目、「共通」は人間科学部での共通科目である。大学院科目については、回答数が少ない学系があるため一括して集計を行った。なお、各学系によって 1 科目あたりの受講者数などの状況が異なるため、科目群間でアンケート結果を単純に比較できない点に留意する必要がある。また、途中で受講を断念した科目については回答しなくてよいとアンケート画面に明記したにもかかわらず、対象の授業を 12 回以上欠席している回答者が全体の 13.8%いる。設問では欠席回数を尋ねているが、出席回数を回答すると勘違いしている学生がいたかもしれないので、2012 年度後期より出席回数を尋ねる形で設問文の変更を予定している。

平成 24 年度前期では、授業全体に対する評価を 5 段階で尋ねる設問 13「この授業は全体として良い授業だったと思いますか？」の回答の平均値が 3.79 であった（数値が高いほど高評価）。前年度後期の平均値 3.94 より若干下落している。今回とおおむね同じ科目を対象とした平成 23 年度前期の平均値は 3.81 で、ほぼ同じ数値が出ている。前期よりも後期の方が若干評価が高くなる傾向があるようである。

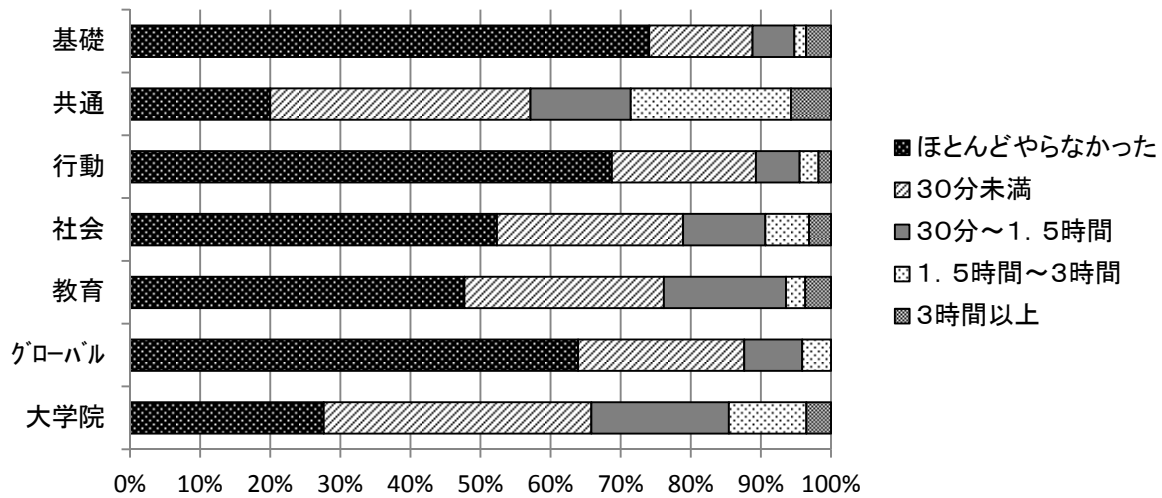
今回のアンケート結果では、設問 2「この授業の予習・復習にあてた 1 週あたりの平均時間はどれぐらいですか？」における「ほとんどやらなかった」という回答の割合が 57.4%で、前年度前期の 62.18%、前年度後期の 62.9%から減少した。理由は色々あるだろうが、人間科学部では前年度より学生の予習・復習を促進するような「自主的学習を促すシラバス作成指針」に沿ってシラバスを作成するようにしたので、その効果が表れてきている可能性も考えられる。

各設問の結果の詳細は以下の通りである。

1：この授業を何回欠席しましたか？

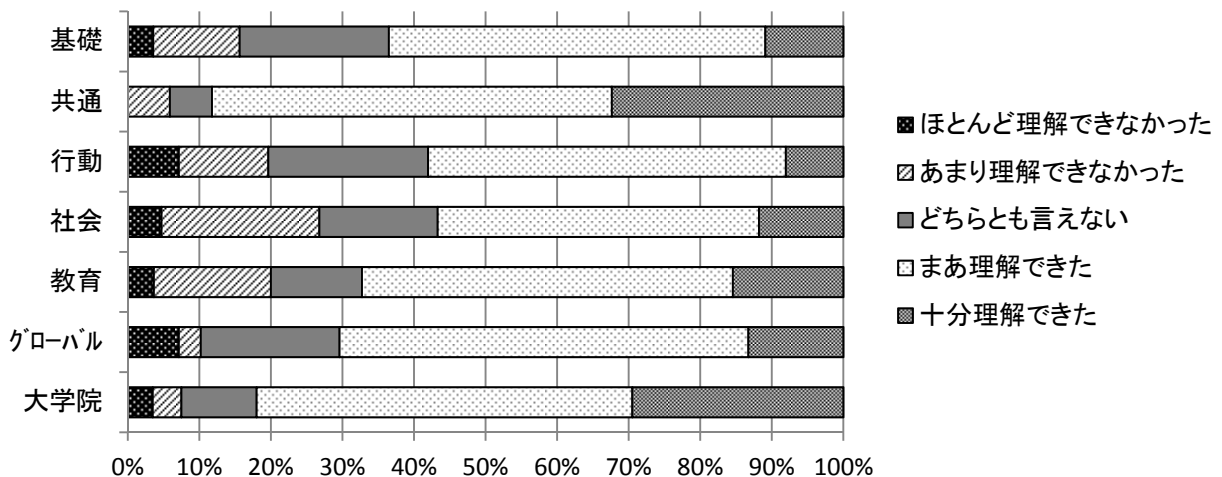


2：この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれぐらいですか？



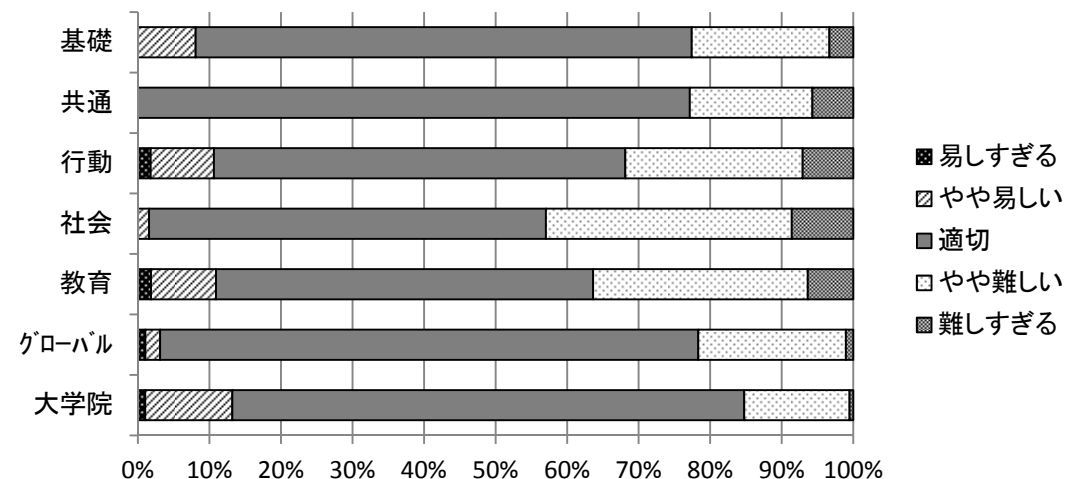
平均値：1.73 標準偏差：1.04

3：授業内容は理解できましたか？



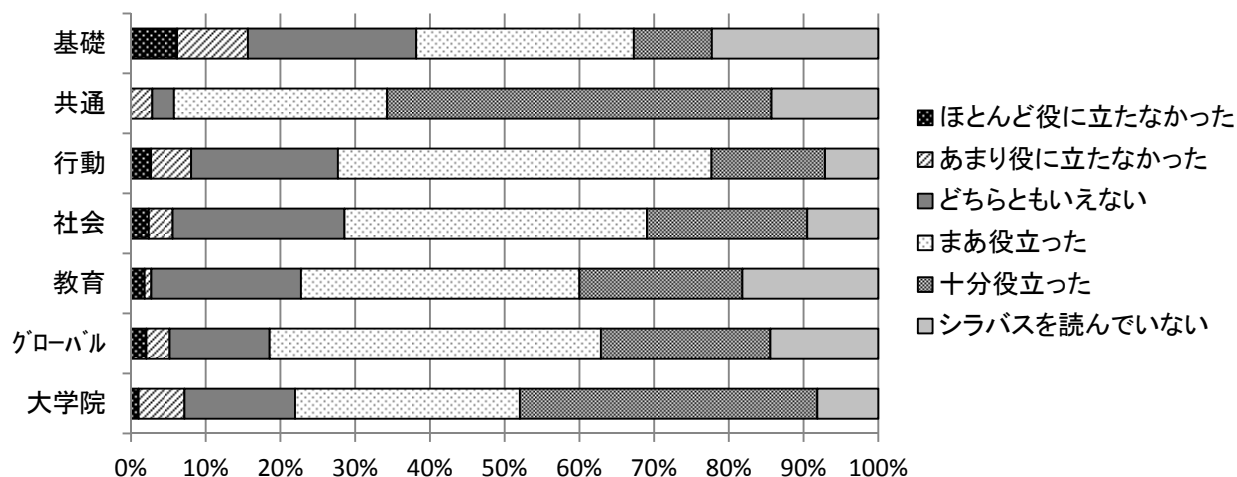
平均値：3.63 標準偏差：1.01

4：授業内容の難易度はどうでしたか？



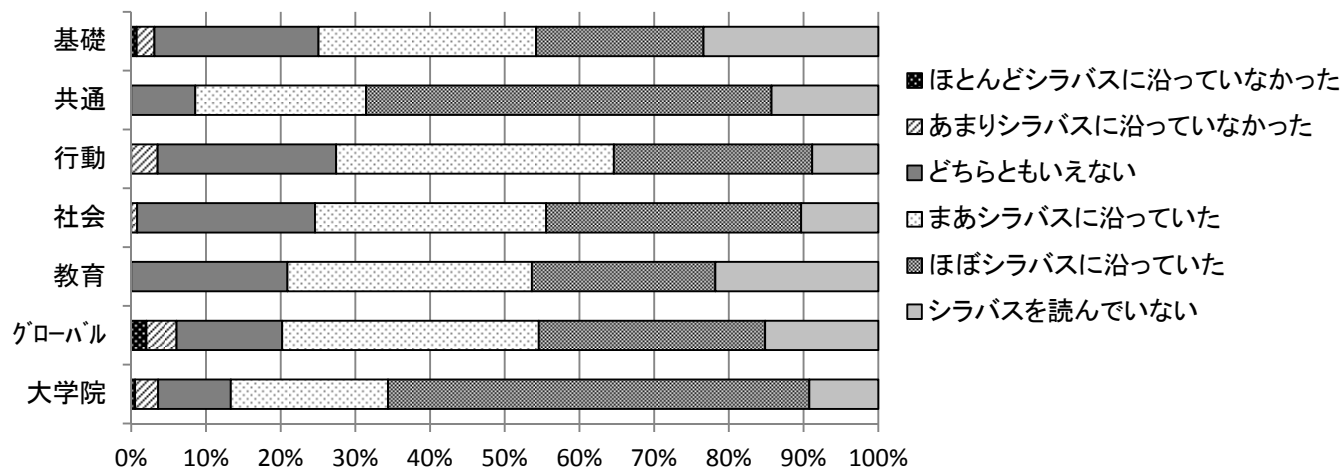
平均値：3.21 標準偏差：0.66

5：シラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？



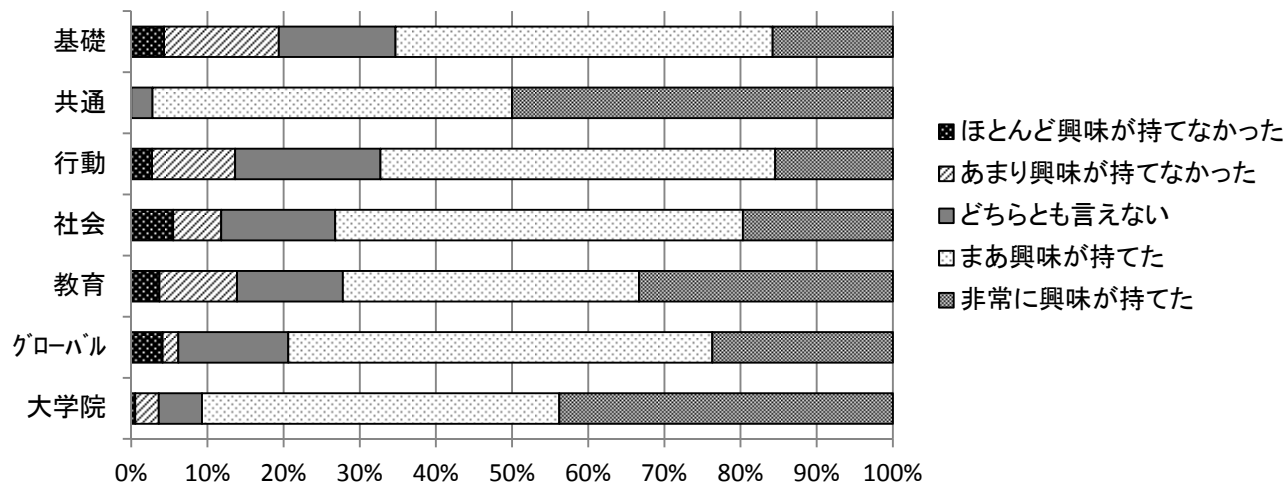
平均値：3.18 標準偏差：1.66

6：授業はシラバスに沿って展開されましたか？



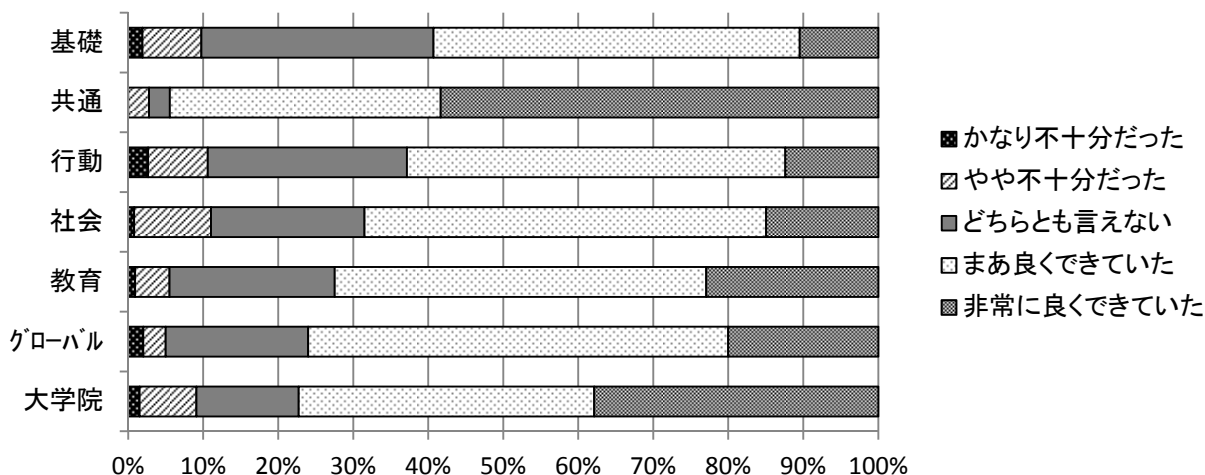
平均値：3.40 標準偏差：1.72

7：授業はあなたにそのトピックに対する関心を引き起こすものでしたか？



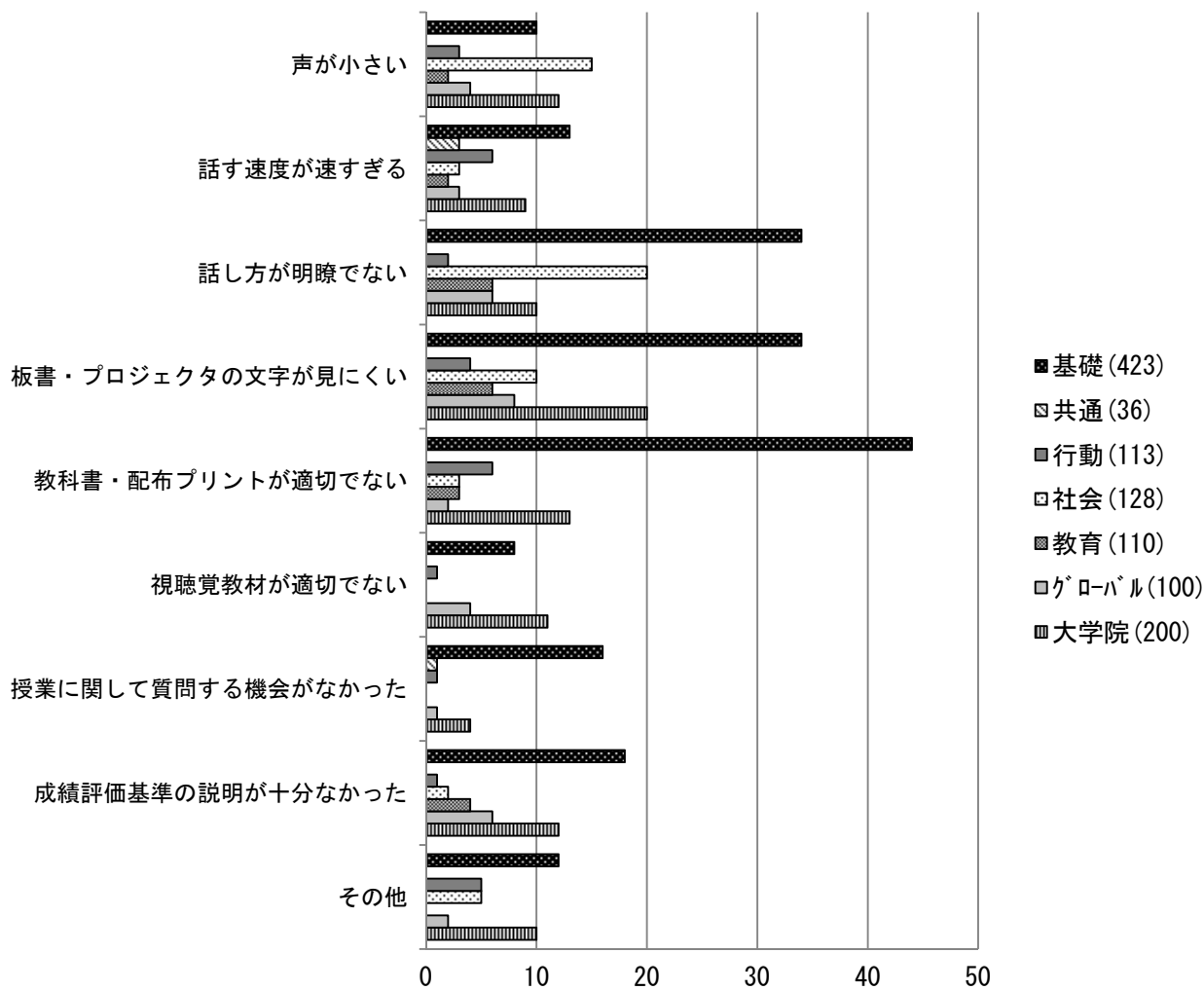
平均値：3.83 標準偏差：1.01

8：授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていきましたか？



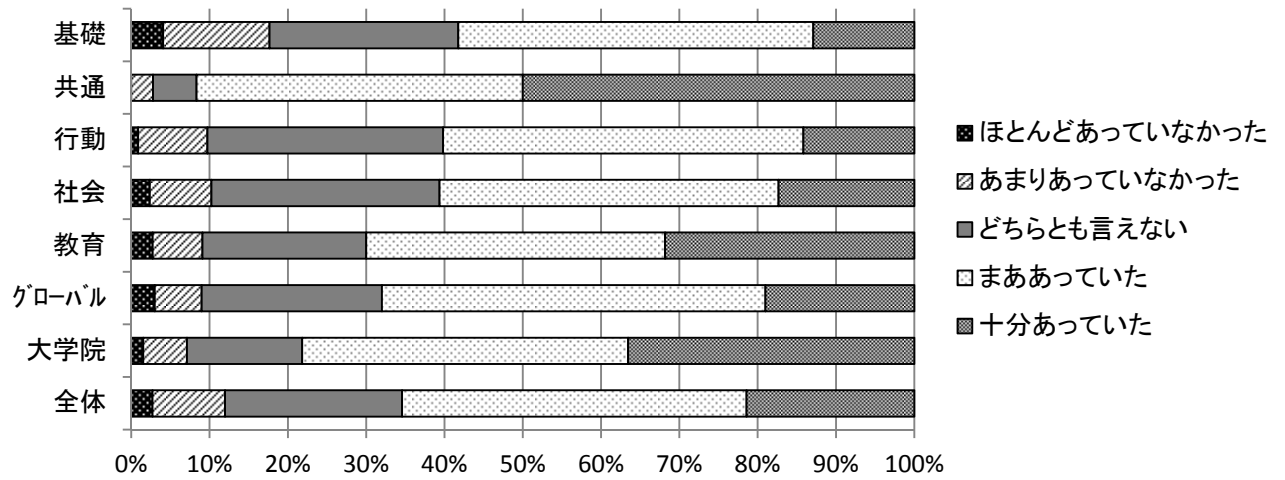
平均値：3.77 標準偏差：0.90

9：授業の進め方について、以下の点で気になったことがあれば、該当する項目にチェックを入れてください。[複数回答可] ※数値は回答数。()内の数値は各カテゴリーの回答数。



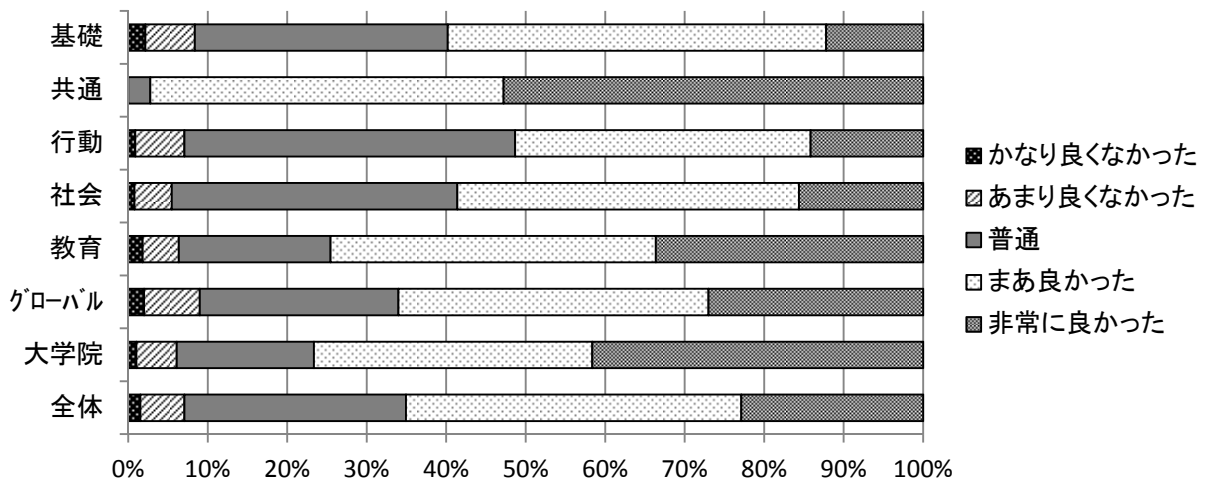
全体の回答数=1110

12：この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか？



平均値：3.72 標準偏差：0.99

13：この授業は全体として良い授業だと思いますか？



平均値：3.79 標準偏差：0.91

問 13 より学部講義科目に関する満足度の結果を示す（回答者が 10 名以上の科目のみ）。
 大学院開講科目については回答数が少ないため全て対象から除外した。回答数とは質問 13 に回答した人数を示し、平均値が高いほど受講生の満足度が高いことを意味している。

2012 年度前期に開講された学部のアンケート対象科目 61 科目のうち、回答数が 10 以上の科目は 31 科目で、そのうち平均値が 4 以上の科目は以下の 11 科目であった。

2012 年度前期 学部講義科目 満足度の平均値が 4 以上の科目

	回答数	問 13 平均値
同和教育論	14	4.57
キャリアデザイン概論	17	4.53
紛争復興開発論 I	10	4.50
臨床心理学 II	18	4.33
比較福祉論 II	12	4.25
国際協力学 I	10	4.20
比較行動学	12	4.08
教育人間学 II	18	4.06
学校社会学	23	4.04
臨床教育学概論	40	4.00
ボランティアの集団力学	16	4.00

3-3. 担当教員からのコメント (2012 年度 前期)

以下は、授業改善アンケート対象科目（ただし、基礎科目は除く）について、担当教員がアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの一覧である（教員名の五十音順に掲載）。

足立 浩平
心理統計法
統計学のような数理系の学問は難解な感がありますが、わからない事があっても、むしろ気にしないことが大切です。実際に、統計解析法を使う場面になってから、解析を行った後に、自分が理解していることに気づくことが多いことと思います。

池田 光穂
応用人類学特講
アンケートの回答はありませんでした。受講者は院生 2 名です。2 人とも優秀な成績で合格しております。授業の内容は下記をごらんください。 http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/120320AAnthro.html

石井 正子
紛争復興開発論Ⅰ・紛争復興開発特講Ⅰ
授業は、一部参加型を取り入れ、学生どうしがディスカッションをする機会をもうけるなど、受動的な講義にならないようにつとめた。そのことが工夫しているにとらえられていることを、うれしく思う。来年度からは、ディスカッションを実施しやすいように、さらに工夫をしていきたい。また、成績評価の基準に関する説明は、第 1 回の授業で行ったつもりであったが、不足しているとの回答をいただいた。来年度は、この反省をいかしたい。

大谷 順子
地域秩序論Ⅱ
ゲストスピーカーも 3 人お呼びしましたが、アメリカの大学の研究者が同じ課題をどのように見ているのか聞いて面白かったとか、JICA 職員など実践の場からの話を聞いて、就職活動の参考になったというコメントがあり、頑張って日程や予算の調整をして、ゲストスピーカーに来ていただいた甲斐がありました。PPT の字をもっと大きくしてくださいというコメントがありました。字が読めない方は特に、前のほうに座ってください。今年は、人間科学部の学生だけでなく、法学部や外国語学部の学生も受講しに来ており、教室はいっぱいでしたが、前に座っている人は熱心な院生が多く、後ろに座っている人たちは学部生が多くて内職をしていたりしたようです。本講義は、学部と大学院の同時開講ですが、去年は、大学院と学部の評価に差をつけないでほしい、とコメントがありましたが、今年は、差をつけてほしいとコメントがありました。学生によって希望や期待が違うので、全員の要望に応えることは難しいですがまた工夫を考えてみます。

地域秩序論特講Ⅱ

ゲストスピーカーも3人お呼びしましたが、アメリカの大学の研究者が同じ課題をどのように見ているのか聞いて面白かったとか、JICA職員など実践の場からの話を聞いて、就職活動の参考になったというコメントがあり、頑張って日程や予算の調整をして、ゲストスピーカーに来ていただいた甲斐がありました。PPTの字が読めないで、もっと大きくしてくださいというコメントがありました。字が読めない方は特に、前のほうに座ってください。今年は、人間科学部の学生だけでなく、法学部や外国語学部の学生も受講しに来ており、教室はいっぱいでしたが、前に座っている人は熱心な院生が多かったです。本講義は、本来大学院生向けのものが、学部と大学院の同時開講となったものですが、人数的には学部生の数が圧倒的に多く、その雰囲気にはひびかれてしまいがちです。両方のレベルに合わせることは難しいのですが、熱心な院生の方々も満足できるように、工夫を考えていきたいと思います。

岡田 千あき

国際社会開発論Ⅰ・国際社会開発特講Ⅰ

今期は専攻以外の学生を含め、多くの学生が受講してくれました。ありがとうございました。講義の最後に授業の感想を聞きましたが、「難しかった」という回答から「簡単だった」という回答まで幅があり、試験の結果を見ても、受講生の理解度に差が見られました。内容の工夫をしたり、出席を取るなど更に理解度を上げてもらえるように授業の内容を再考したいと思います。ゲストスピーカーの講演や体験談を話した回が好評でしたので、これらについては今後の授業でも取り入れていこうと思います。

荻阪 満里子

認知脳科学論

人間科学研究科、医学研究科の複数の先生による講義で、内容は現代の最先端研究が盛り込まれていました。そのため、基礎知識が無いと難しいところもあったと思います。ただ、このような研究が進んでいるのだと、知っていただくことはできたかと思います。参考文献を紹介いただいているので、それで補ってください。来年度は、各先生の講義が、もう少し時間的に余裕があるように、計画したいと思います。

小野田 正利

学校経営学特論

院生の授業評価を見たが、ほぼ高い評価を得られたと思うし、それなりに体系化して、授業の中味を配列していくことができた、自分自身でも感じている。昨年度から大学院生向けのこの講義では、15回全部を「学校と保護者をめぐるトラブル」というテーマで実施したが、一方的な講義形式にならないように、3度のワークショップの回を設けて、参加型としたほか、適宜に映像資料を使って、ある程度完成された形へと近づいているような手応えがある。配布する資料も、研究論文などを活用している。評価についても、計3回のレポートを課しておこなった。次に工夫するとすれば、その回の概要を簡潔にまとめた資料を配付するなどの余地があるかもしれない。

川端 亮
計量社会学・計量社会学特講
授業時間ぎりぎりまで講義している場合がおおく、次回の課題を明瞭に指示する時間がなく、混乱する受講生が多くいたことについて、反省し、次回の講義においては、改善するようにしたいと思います。

木前 利秋
環境と社会・環境と社会特講
本科目は、オムニバス方式を採用して複数の教員によって毎回異なったテーマを取り上げてまいりました。アンケート結果を見るかぎり、大きな問題はなかったかと存じますが、授業改善の余地はまだ十分にあるかと思えます。今後とも出席者の関心に沿った内容をシステムティックに展開できるよう工夫していくつもりです。

木村 涼子
ジェンダー教育学・ジェンダー教育学特講
まず、アンケート回答者の少なさが反省点です。講義の終わりに十分に依頼したつもりでしたが、多くの回答者を得ることができませんでした。現時点で四人の方の回答が寄せられていますが、それらの方々の貴重な意見を参考にしていきたいと思えます。一つには、内容をもう少し高度なものにした方がよかったかと考えます。来年度は大学院生のことをさらに意識した内容をつくりあげていきたいと思えます。また、話し方が不明瞭だと感じられた方がお一人いらしたので、その点を今後気はつけていきたいと思えます。

熊倉 博雄
人間科学概論 I「行動の科学」
講義冒頭で説明したように、行動学科目のカリキュラムは、第1 Semesterから第3 Semesterまで連続したものと考えています。第2および第3 Semesterは、科目名に「心理」という言葉があるため、生物系の分野は第1 Semesterに収めざるをえません。また、この科目は、行動学科目進学者のみならず、人間科学部全員必修であるため、それにふさわしい内容を提供したいと考えています。行動学から、人間科学部生全員に提供できる内容としては、本当の意味での「科学」研究の実際を知ってもらうことです。さらに、現代の状況を考えると、脳科学についての基本的な理解は、人間科学部生全員に持ってほしいという信念があります。このため、一部の学生諸君には不満が生じるかもしれませんが、真に科学的な態度を持ってもらうことが重要だと考えています。
行動形態学
講義の冒頭で説明したように、現行カリキュラムで生物関係の講義数があまりにも少ないため、内容が過剰になっているという自覚はあります。ノートが取れない、というのは問題なのでなんらかの解決ははかりたいと思えます。

近藤 博之
教育動態学
時間割の都合で受講者の数が予想外に多くなり、少しやりにくい面がありました。29名の回答は毎回の出席者及びレポート提出者の半分以上ですが、全員が答えたとしても恐らくこんなものなのだろうと思います。改善の余地がまだまだあると受け止めました。ところで、レポート採点に合わせて毎回の出席表から各人の出欠状況を転記したところ、入学時の「あいうえお」順の席順がいまだに授業中の居場所に反映されていることが分かりました。自由意思で選択しているつもりでも、実際にはそうでもないことのよい例だと思えます。
教育動態学特講
2人だけの回答なのでコメントは控えます。

佐々木 淳
臨床心理学特講 I
全員からの回答による結果ではなかったが、一定の目標は達成したものと考えられる。授業で扱う内容にいくつか焦点をつけて特に重要な点が伝わるように配慮したい。
臨床心理学研究法特講
全員からのコメントによる回答ではなかったが、来年度はより実用的な授業になるように配慮したい。

佐藤 眞一
高齢者行動論
学部3年生以上向けの講義科目である。回答者18名のうち4名はほとんど出席していない学生の回答なので、この4名が否定的な回答をしているとすれば、他のほとんどの学生は肯定的な回答であったと思われる。最終試験は持ち込み可とのことだったのでそうではなかったとのコメントは、当該学生の誤りである。その他、特に改善すべき点についてのコメントはなかったと思料する。
臨床死生学・老年行動学特講 I
大学院生向けの講義科目である。回答者8名のうち2名はほとんど出席していなかった学生であり、この2名が否定医的な回答をしていると仮定すると、他の6名の回答は本科目に対して肯定的に回答していた。後半の授業の方法については、執筆中のテキスト原稿を読みながら、かつ詳細な解説を施しながら行うということを予告していたのであるから、コメントについては当該学生の授業態度に問題があったと思われる。あえてパワーポイントを使用しない講義をすると宣言して行った講義であり、他の学生からは極めて高い評価も受けている。

鈴木 広和
動態地域論 I・動態地域論特講
来年度のシラバスを、より講義内容を反映したものに修正したいと思います。

園山 大祐
教育制度学特講
予習、復習が不十分であったため、指導を徹底したい。

高田 一宏
コミュニティ教育学特講
回答者が4人と少ないためコメントは難しいが、受講生の関心に沿った内容で、難易度も適切だったように思われる。今後は、アンケートへの協力をさらに徹底して呼びかけたい。

津田 守
多文化共生社会論Ⅱ・多文化共生社会論特講Ⅱ
受講生の半数弱がアンケートに回答くださいました。ありがとうございます。全員が「授業内容を理解できた」とのことでした。ただ、学部生は全員が難易度について「適切」とのことでしたが、大学院生にとっては「易しい」ないしは「易しすぎる」との回答も半数はありました。いずれにせよ、ほとんどが「(非常に)興味を持った」とのことでした。求めているものにあっていたかどうか、学部生間と院生間で多少濃淡がありました。こういったズレを念頭におきつつ、来年度の運営をさらに工夫してみます。講義最終日に、それまでの口頭発表読み原稿を集めた文集を皆さんに配布できたのですが、一つの目に見える成果として嬉しく誇りに思っています。

堤 修三
社会保障政策論Ⅰ・社会保障政策論特講Ⅰ
学部生は難しい、院生にはまあまあの程度の難しさだったようだが、レポートの内容をみるとあまり差はなかった。社会に出たら必要な、ものの見方や考え方を学んでもらえれば良いと思って講義をしたが、それがどの程度伝わったか。詳しいレジュメを配っているのだから、予習も復習も期待していないが、授業中、昼寝をしている学生もかなりいた。せめて授業だけは真剣に訊いてほしいものだ。75名ほどの受講者からの質問・感想にすべて文書で回答したが、エネルギーを使う割には、真剣に質問していた学生は3割程度か。国際公共政策の学生が4名ほど受講していたが、皆、真面目だった。

常田 夕美子
民族誌学
人間科学研究科の多様な分野の学生が受講したのはよかった。しかし、登録のみで出席しない学生が多数おり、混乱を招いた。

中村 安秀
国際協力学Ⅰ・国際協力学特講Ⅰ(医療通訳入門)
全体として、出席率も高く、ワークショップに対する評価も高かった。ただ、受講者総数に比較して、アンケート回答者が少なかったのが残念である。国際協力学Ⅰでは10名の回答者のうち1

名、国際協力学特講 I では 12 名の回答者のうち 4 名が、12 回以上欠席であった（これは、出席回数と間違っ、書いたものだろうか？ できれば、出席回数を尋ねる質問形式にしたほうがいいかもしれない。「声小さい The instructor's voice was too soft.」という回答が 2 名あった。ただ、質問内容の日本語と英語が対応していない気がする。

国際健康開発論特講

2 名の回答者であった。「少人数でアットホーム的な雰囲気」、「授業の一環として学外での講演にも参加」といった部分を、評価していただいたのはうれしい。今後も、従来の教室講義型の講義ではなく、よりフレキシブルな講義形態をめざしていきたいと思う。

中山 康雄

人間科学基礎理論・人間科学基礎理論特講

アンケート内容については、今後の参考にしたい。授業に関心を持って参加した学生とそうでない学生の間では、理解度の違いがでたと思う。また、アンケートとは別に、筆記試験の方で、真剣で考えさせられる回答が今年度もかなりあったので、こちらの方も参考にしたい。

日野林 俊彦

比較発達心理学

性に関わる講義であり、学生の関心がどのあたりにあるのかを踏まえた講義になればよかったのかと反省しています。また性に関するテーマは、現時点では、個別の学問と重なっているため体系的な話を展開するのは困難な領域と思います。今後は、そのあたりの共通理解から講義も展開できればと考えました。

福岡 まどか

地域知識論 I・地域知識論特講 I

第 1 セメスターの授業は映像を用いることが多く、特に第 1 セメスターの後半は 比較的まとまった長さの映像作品を見て、質問やコメントの提出を求める形式の授業がありました。映像作品はどれも大変貴重なものを用いており、重要な情報も多く提供していたと思いますが、「映像が長すぎる」、「英語の映像を長時間見るのが疲れる」、などのコメントもありましたので、今後は映像の時間や、前後の解説やディスカッションの時間配分などを調整することにもう少し努めていきたいと思っています。

国際教養 I アジアの文化と社会を知る(全学共通教育科目)

この授業では東南アジアの上演芸術について様々な角度から考察しました。できるだけイメージが湧きやすいように映像、音響資料の他にも仮面や人形などの実物も使いながら、授業を行いました。また基本文献の紹介も行いました。コメントの中には「インドの叙事詩についての知識が深まった」、「授業の後に参考文献を読んでみたくなった」などの回答が見られました。この授業を履修して、そこから文献調査なども行い、東南アジアの芸術に広い関心を抱く人が増えることを期待しております。

藤岡 淳子
人格心理学特講
15 コマの講義で、ロールシャッハの施行法からスコアリング、構造一覧表の作成と解釈の基礎までを学ぶのは、大変なことであるが、ほとんどの学生たちは、よく予習・復習をして学んだと考えている。コメントについては、今後の参考にしたい。

藤川 信夫
教育人間学Ⅱ・教育人間学特講Ⅰ
授業の理解度は、おそらく該当箇所を事前に予習しているかどうか依存しているように思う。いずれにしても、全般的には、当初想定していた通りの結果が出ているように思う。今後も、授業方法の改善に積極的に取り組んでいきたい。

丸田 健
キャリアデザイン概論・キャリアデザイン特講
この授業は、今回が初めての試みでした。人間科学部の卒業生で、民間で新卒採用に関わる仕事に就いている皆さんの先輩を講師に招き、土曜日四日間集中の形での授業になりました。週末の授業であるにも拘わらず、多数の受講者があったことを喜んでます。また授業後のアンケート結果を見ても、良い授業であったと満足の声が多く出ました。受講者の皆さんは、民間企業志望者以外にも、公務員志望の方あるいはいったん大学院への進学を考えておられる方もいたはずで、授業では、そのような多様な進路を想定しつつ、キャリアについて考える機会を提供してもらったものでした。ゲストで登場いただいた他の3名の卒業生の体験談も参考に、それぞれのキャリアを開拓していただきたいと思います。

宮原 暁
超域地域論Ⅰ・超域地域論特講Ⅰ
地域とは、人々が生存のために必要な空間とのかかわり合いのなかで生ずる政治的、文化的な場ととらえることができる。それは、国民国家のように持続的に人々の認識を規定するものもあるが、国民国家のなかにも伸び縮みする「空間とのかかわり合い」が複数併存する。また、一つの地域は、別の人々にとっての地域と衝突することもある。地域研究は、こうした地域を双方向的、重層的に把握することで人間の理解につなげようとする学問分野である。こうした他者のまなざしを意識せざるを得ない学問分野では、研究・探求の手順をラディカルに客観化すれば真理が見つけれられるというわけではない。超域地域論では、この前提に立ち、人と環境との関わり方としての文化が、異なる「地域」が接触する局面においてどう変化するか考えた。社会変化に関する理論は、地域のダイナミックなあり方をいくつかの局面に分けて分析したのちに、それを統合するという作業を通してであろう。地域研究講座は、こうした局面に即して構想されている。超域地域論を受講した皆さんは、地域研究講座の他のレイヤーを知ることで、本講義の意味をより深く理解することができよう。

三好 恵真子
人間環境論Ⅱ
全体として、出席率が高く、授業への関心度や理解度が高く、大変嬉しく思いました。様々な分野の受講生がいるために、参加型の機会を多くしたことも反映されていると思います。自然科学の内容を扱うため、出来るだけ分かりやすいテキストやパワーポイント等の映像資料を準備しているつもりですが、プロジェクターの機種等の関係で、色の写りが悪かったところがあったとご指摘を頂きました。その点、次回への課題にしておきます。
人間環境論特講Ⅱ
全体として、出席率が高く、授業への関心度や理解度が高く、大変嬉しく思いました。大学院向けの授業のため、何らかしら研究に役立つ内容になるよう、柔軟に対応し、議論や参加型の機会も多くしました。自然科学の内容を扱うため、出来るだけ分かりやすいテキストやパワーポイント等の映像資料を準備しているつもりですが、プロジェクターの機種等の関係で、色の写りが悪かったところがあったようです。その点、次回への課題にしておきます。
人間開発学特講
人間開発学講座の教員によるオムニバス形式の授業でしたが、受講者の理解や関心の度合いに、やや差が出たように思います。ご意見に鑑み、授業のタイムスケジュールを少し工夫して、参加型の形式を極力取り入れたり、総合討論の機会を作るなどが必要性を感じ、今後も課題にしたいと思います。

牟田 和恵
人間科学概論Ⅱ
内容はおおむね学生の興味関心に沿っていることがわかった。試験時間が短かったという記述が2名あったので、今後の参考にしたい。

村上 靖彦
行為と倫理・行為と倫理特講
いただいたコメントに対するフィードバックが十分でなかった点を反省しております。これからは十分に時間をかけようと思います。板書も注意します。どうもありがとうございました。

Saori YASUMOTO
Quantitative Research Methods
I appreciate students for taking time to evaluate the course. I wish I could receive more comment from students (especially written comment), but it was nice to be able to confirm what worked and/or not worked in classroom. I will take students' comment seriously to further develop the course.
Academic Writing II
I appreciate students for taking time to evaluate the course. This course was a little challenging for me to teach for many reasons; however, the hard work of students made the

course meaningful and enjoyable. I will keep working hard to improve the course based on students' comment.

山田 一憲

比較行動学・比較行動学特講 I

この講義では、「進化の機構」と「Tinbergenの4つの問い」を理解してもらうことを目的として設定していました。期末試験の結果やアンケートの回答を見る限り、これらの目的はほぼ達成できたように思います。アンケートのコメントには「板書が多い。時間の無駄。」という意見がありました。板書するかどうかは、各自の判断に任せており、強制ではありません（どちらかというところ、しっかりとした板書があった方が助かるというコメントをもらうことが多いです）。私の講義は、論文の図表をスライドで示して、そのデータの読み取り方を説明し、内容を黒板に文書でまとめる、という手順で進みます。この手順を採用するのは、データを読みとって文章化することが、科学論文を作成する上で大切な技術だからです。アンケートの回答数やコメント数が少なかったのは残念でした。

山中 浩司

文化社会学

今回のアンケート結果では、内容がやや難しいという回答が結構ありました。授業方法を工夫することで内容の水準を下げずに理解してもらえるように配慮します。受講生が多いためにポートフォリオシートによるフィードバックも限界があり、授業中にもう少しコミュニケーションをとる時間を多くするように改善しようと思います。

文化社会学特講

回答数が少ないので判断は難しいですが、内容的にはやや易しいという評価であったので、学部生と大学院生の折り合いをつける工夫を考えたいと思います。

Robert Scott North

比較社会学

アンケートの回答率が低いですが学生の評価は悪くない。が、もっと生き生きとした授業がしたい。週一回、90分は物足りない。学生が受講するコマ数は多すぎだし、授業中に参加しないで、座るだけでいい。正直、このような授業は、大学での専門教育にならないと思う。来年度から比較社会学がG-30の授業にもなるそうです。そのために授業の内容を再編してレベルアップに試みたい。

【2012 年度 後期 授業改善アンケート調査結果】

3-4. 授業改善アンケートの概要（2012 年度 後期）

人間科学研究科では、平成 16 年度より、毎学期末に授業に関して受講生に尋ねるアンケート調査を実施している。平成 22 年度後期より実施方式を大幅に改訂し、全科目を対象に授業内でアンケート用紙を配布・回収する方式から、講義科目のみを対象に、学務情報システム KOAN を利用して Web 上で回答する方式に変更した。質問項目も刷新し、また英文を併記して留学生も回答しやすいようにした。実施期間は以下の通りである。

2012 年度後期アンケート回答期間：平成 25 年 1 月 22 日～2 月 8 日

対象科目数・回答数と科目群ごとの内訳は、以下の通りである。受講登録者数に対する回収率は 25.5%である（なお、受講登録者数は受講者数の実態が反映されたものではない）。

平成 24 年度後期授業改善アンケート対象科目数・回答数

学部			大学院		
	対象 科目数	回答数		対象 科目数	回答数
基礎科目	4	123	共通科目	2	11
共通科目	2	5	先端人間科学科目	1	3
行動系科目	12	186	行動学系科目	10	12
社会系科目	14	201	社会学系科目	9	26
教育系科目	12	205	人間学系科目	5	4
グローバル系科目	8	29	教育学系科目	9	23
			グローバル人間学系科目	8	6
学部計	52	749	大学院計	44	85
計(大学院+学部)				96	834

回収率：25.5%

回収結果は数値化して集計し、自由記述分も含めて教員にフィードバックされ、個別の授業の改善に役立てられている。さらに、平成 22 年度後期より、アンケート結果がより授業に反映されるよう、担当講師からアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの提出を求めている。

3-5. 授業改善アンケートの結果（2012年度 後期）

ここでは、平成24年度後期の授業改善アンケートの結果を示す。ただし、自由回答項目については除かれ、選択式の設定についてまとめている。

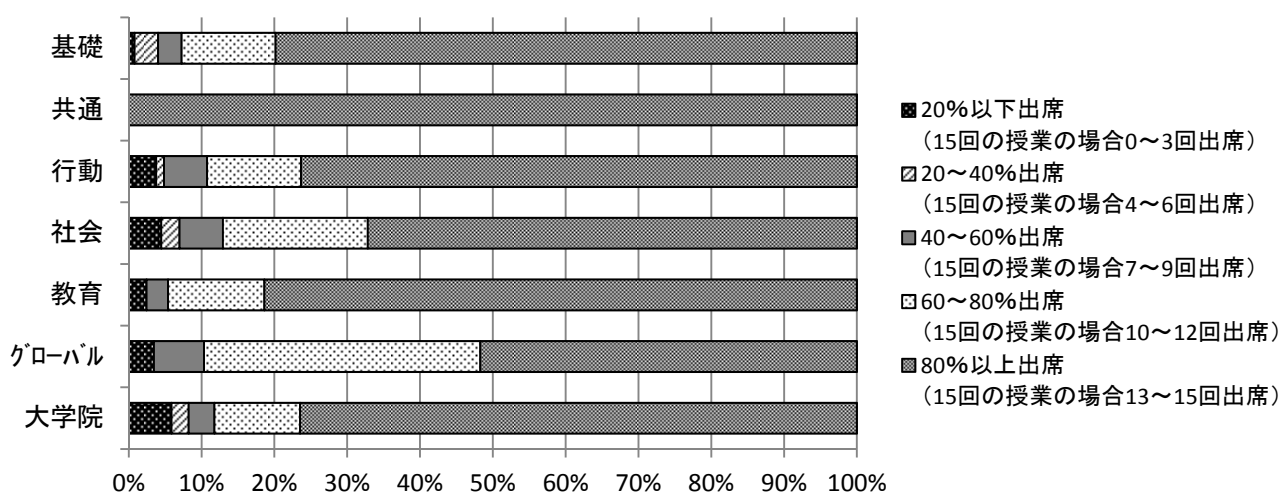
集計は、学部科目については各科目が属するカテゴリーごとに集計を行った。「基礎」は豊中キャンパスで開講される「人間科学概論」等の基礎科目、「共通」は人間科学部での共通科目である。大学院科目については、回答数が少ない学系があるため一括して集計を行った。なお、各学系によって1科目あたりの受講者数などの状況が異なるため、科目群間でアンケート結果を単純に比較できない点に留意する必要がある。今回のアンケートでは、学部共通科目での回答者が非常に少ないことから、共通科目については偏りがあることにも留意する必要がある。前回の授業アンケートでは、欠席率を訪ねていた項目については、誤解のないよう出席率に改めて実施している。系によって多少ばらつきはあるものの、概ね8割程度出席していると回答した学生が大半であった。

平成24年度後期では、授業全体に対する評価を5段階で尋ねる設問13「この授業は全体として良い授業だったと思いますか？」の回答の平均値が4.00であった（1~5の範囲で数値が高いほど高評価となる）。前年度後期の平均値3.81を若干上回る結果となった。

今回のアンケート結果では、設問2「この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれくらいですか？」における「ほとんどやらなかった」という回答の割合が62%であった。昨年度から概ね6割程度の状態が続いているが、平成24年度末に人間科学研究科本館の耐震工事が終了した。改修に当たって学生の自主学習や研究活動促進のためにインターナショナル・カフェやリフレッシュルームなどのスペースを設けている。今後そのような取り組みの成果がどのように表れるかも検討する必要があるが、学生の自主的な学習・授業に関するグループ討議等が促進されることを期待したい。

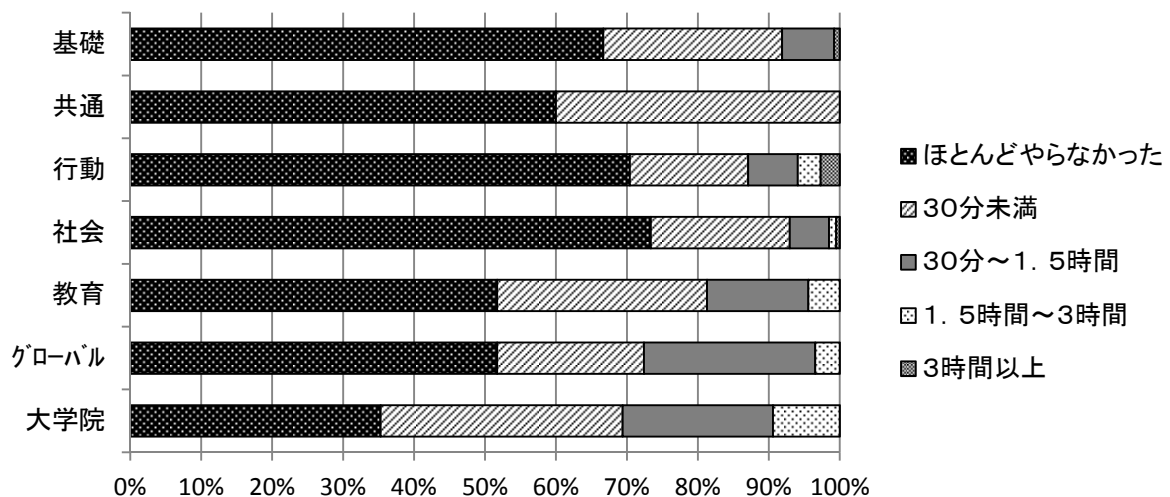
各設問の結果の詳細は以下の通りである。

1：この授業へのあなたの出席率はどうでしたか？



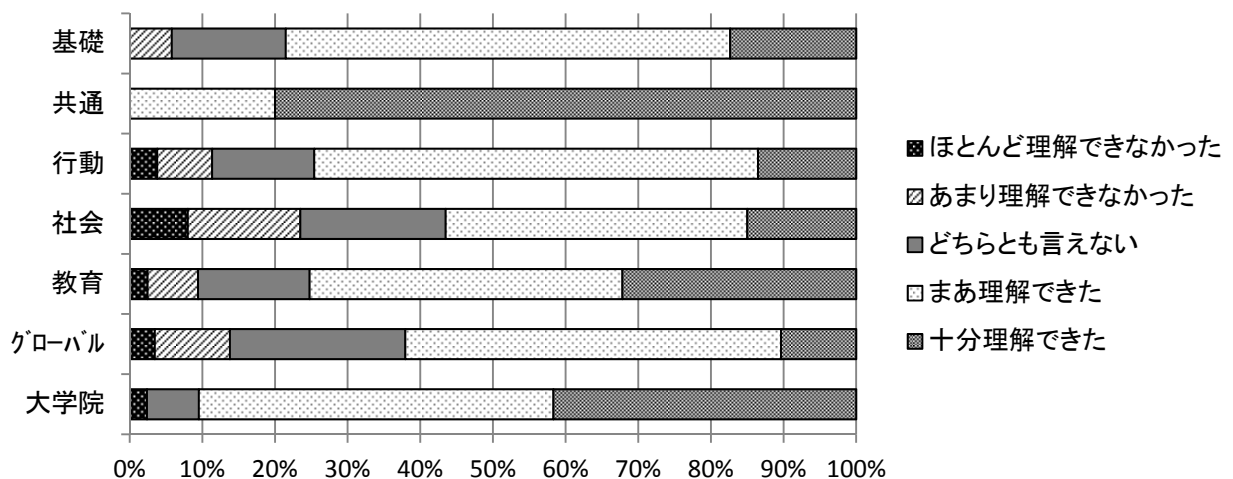
平均値：4.57 標準偏差：0.91

2：この授業の予習・復習にあてた1週あたりの平均時間はどれぐらいですか？



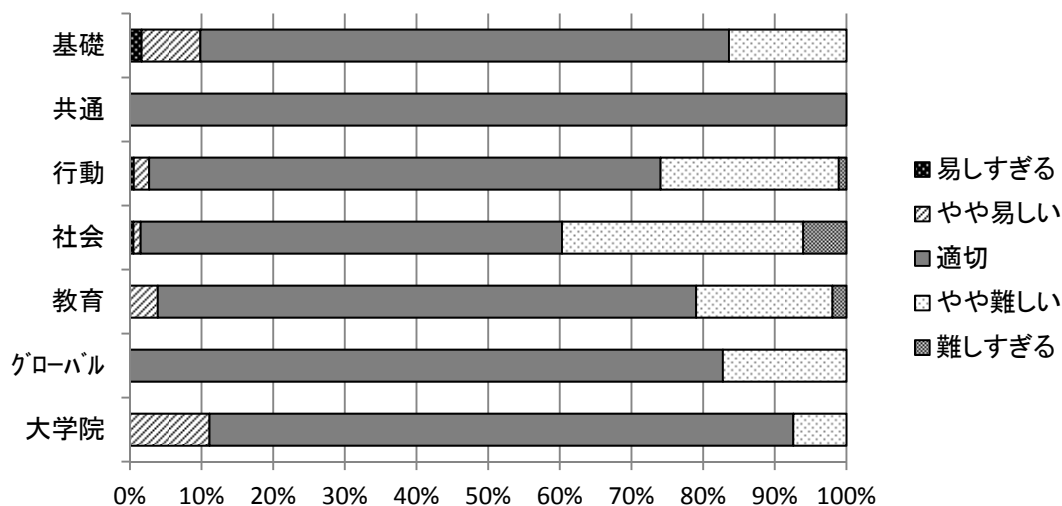
平均値：1.58 標準偏差：0.86

3：授業内容は理解できましたか？



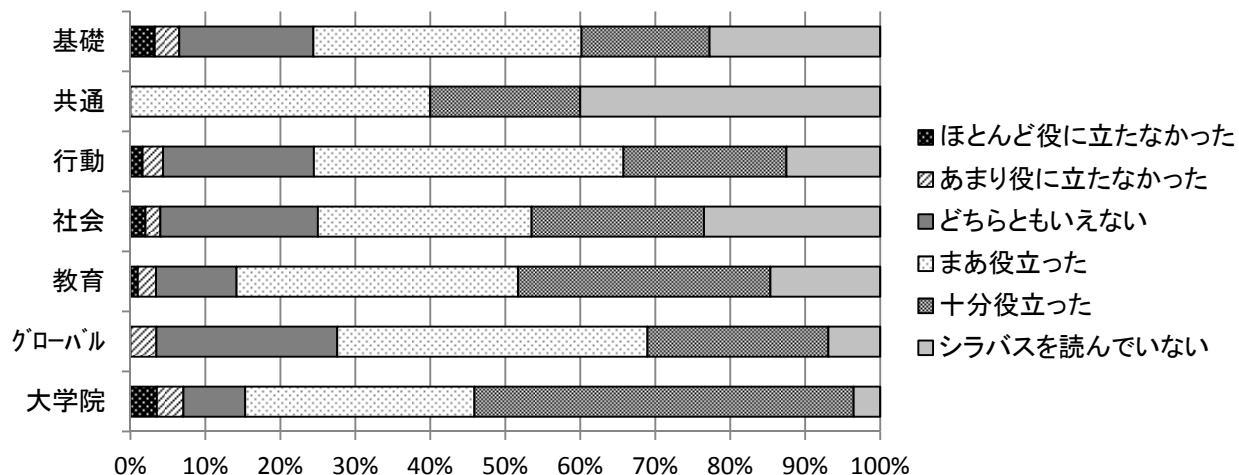
平均値：3.79 標準偏差：1.00

4：授業内容の難易度はどうでしたか？



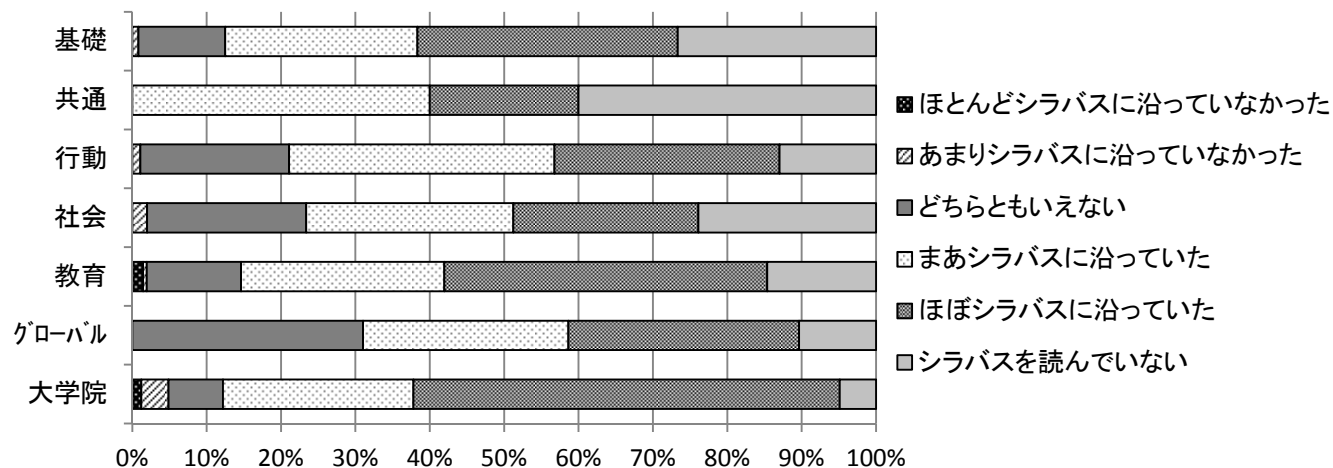
平均値：3.22 標準偏差：0.57

5：シラバスの内容は授業の内容を知るのに役立ちましたか？



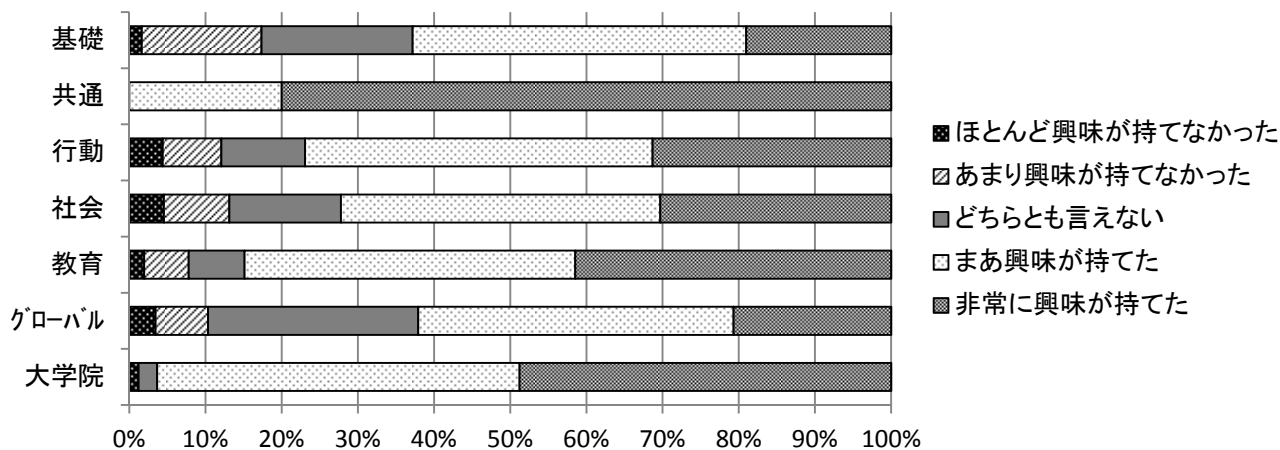
平均値：3.35 標準偏差：1.70

6：授業はシラバスに沿って展開されましたか？



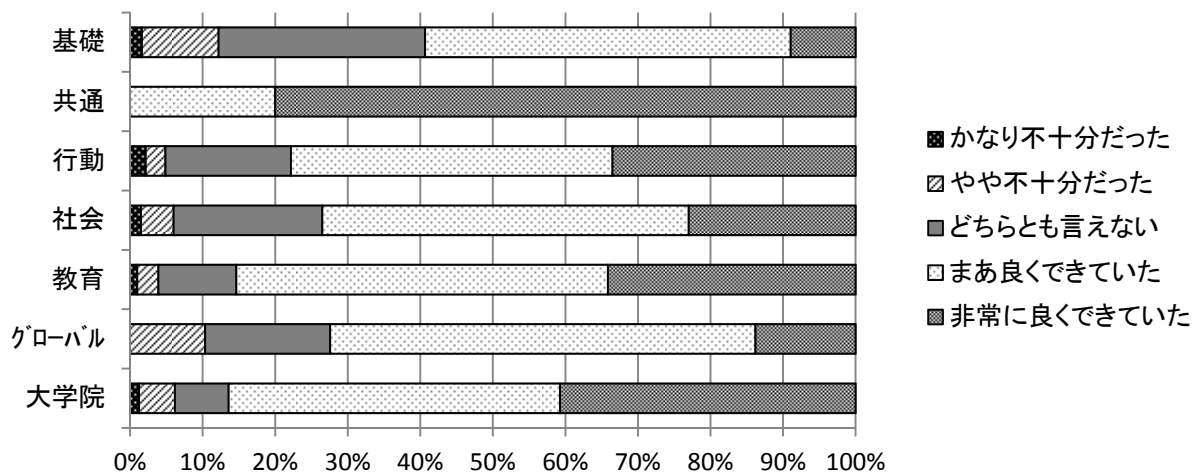
平均値：3.46 標準偏差：1.76

7：授業はあなたにそのトピックに対する関心を引き起こすものでしたか？



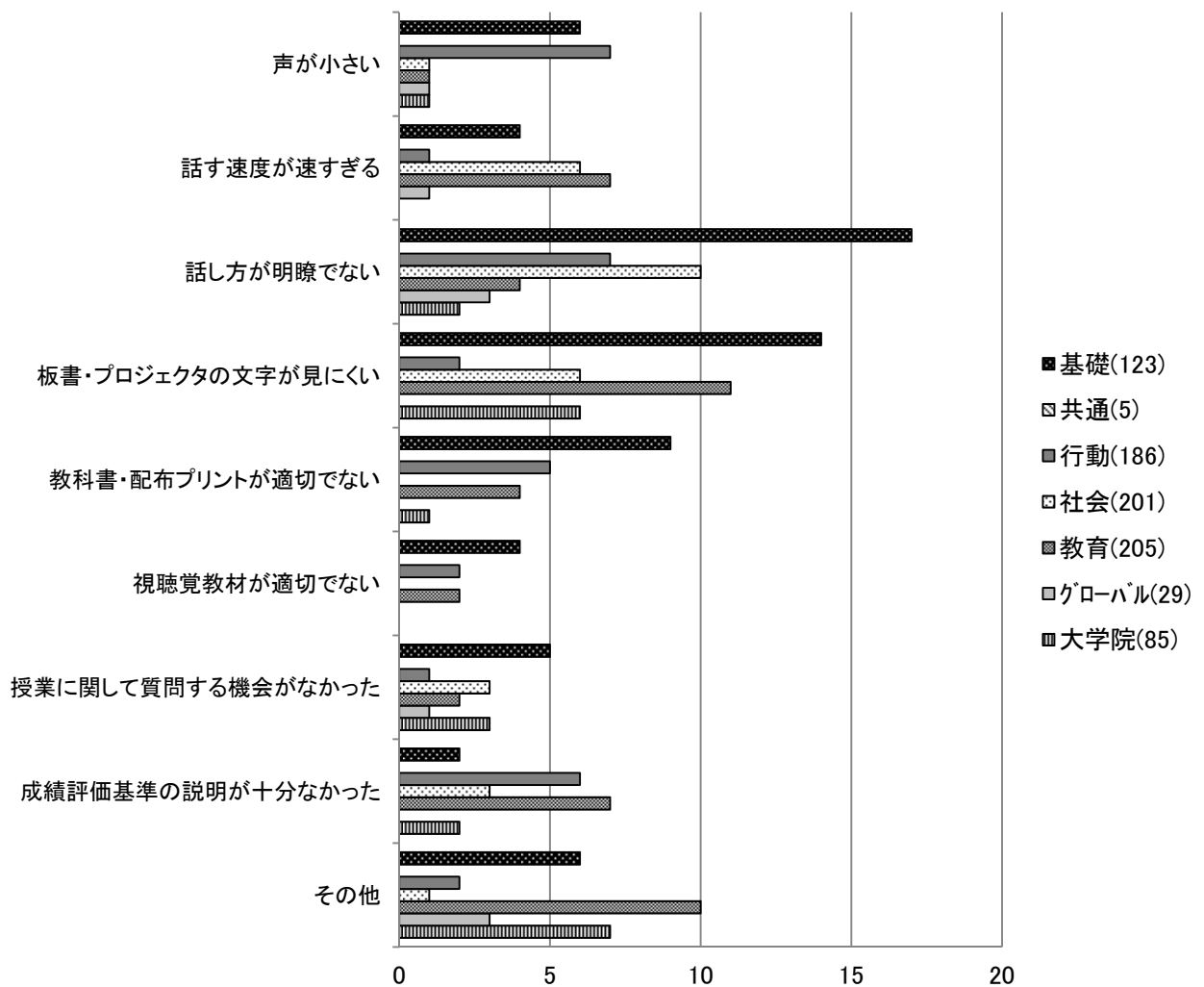
平均値：3.97 標準偏差：1.02

8：授業方法および資料は、十分に工夫・準備されていましたか？



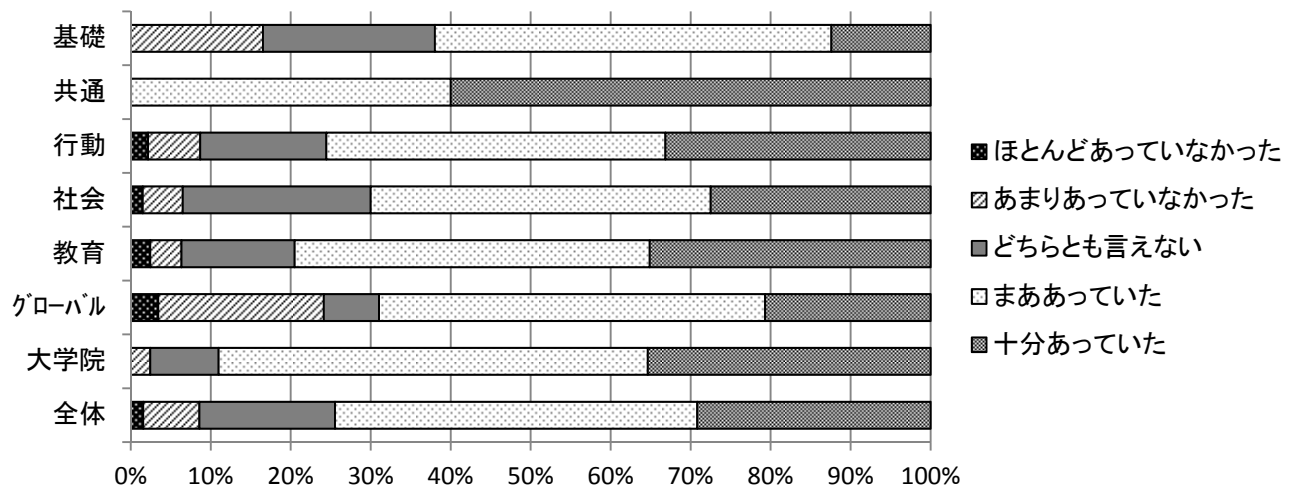
平均値：3.97 標準偏差：0.88

9：授業の進め方について、以下の点で気になったことがあれば、該当する項目にチェックを入れてください。[複数回答可] ※数値は回答数。()内の数値は各カテゴリーの回答数。



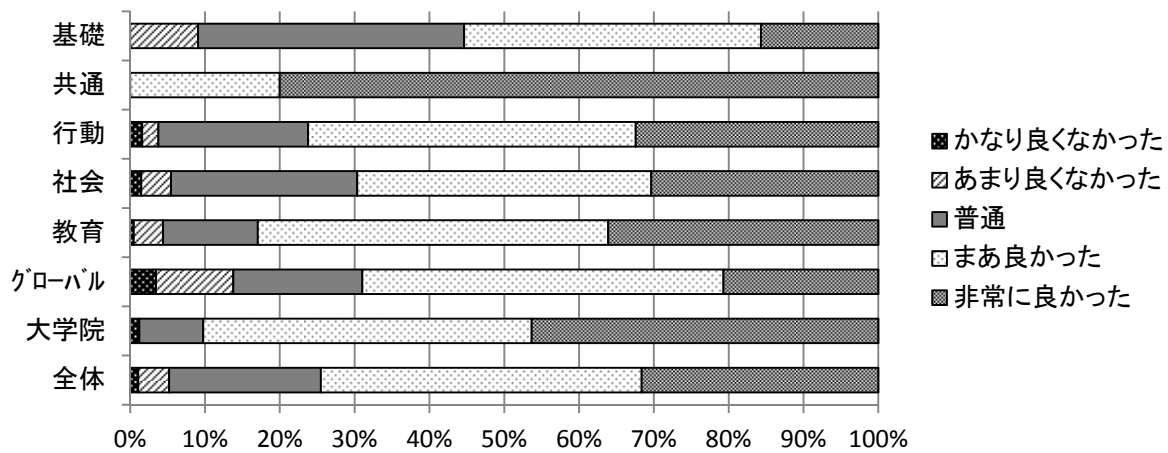
全体の回答数=834

12：この授業はあなたの求めていたものにあっていましたか？



平均値：3.93 標準偏差：0.94

13：この授業は全体として良い授業だと思いますか？



平均値：4.00 標準偏差：0.88

問 13 より学部講義科目に関する満足度の結果を示す（回答者が 10 名以上の科目のみ）。
大学院開講科目については回答数が少ないため全て対象から除外した。回答数とは質問 13 に回答した人数を示し、平均値が高いほど受講生の満足度が高いことを意味している。

2012 年度後期に開講された学部のアンケート対象科目 52 科目のうち、回答数が 10 以上の科目は 36 科目で、そのうち平均値が 4 以上の科目は以下の 18 科目であった。

2012 年度後期 学部講義科目 満足度の平均値が 4.0 以上の科目

	回答数	問 13 平均値
コミュニケーション社会学	22	4.86
基礎心理学	20	4.80
霊長類心理学	15	4.67
学校経営学	24	4.67
教育工学 I	14	4.57
コミュニティ教育学	11	4.45
教育心理学 I	23	4.43
臨床心理学 I	11	4.36
比較福祉論 I	10	4.30
教育文化学	29	4.28
教育コミュニケーション学 I	10	4.20
リスク心理学	17	4.18
臨床死生学・老年行動学	12	4.17
理論社会学	18	4.11
人類学理論	19	4.11
人間と文化	10	4.10
適応認知行動学	16	4.06
比較発達行動学	23	4.00

3-6. 担当教員からのコメント（2012年度 後期）

以下は、授業改善アンケート対象科目（ただし、基礎科目は除く）について、担当教員がアンケート結果も含めて授業を振り返ったコメントの一覧である（教員名の五十音順に掲載）。

青野 正二
環境心理学・環境心理学特講 I
全体的に、アンケート結果の平均値に対して、標準偏差は比較的小さい値となっていた。これは昨年度までと違っていただけである。授業の理解度に関しては、昨年度に比べばらつきは小さくなってはいたが、難易度をみると、やや難しい方向へシフトしていたようである。内容的には、新たなものを取り入れたこともあったが、配付資料などの教材にも問題があったようである。また、定量的な説明について、理解しづらかったことが指摘されていた。受講生の理解度を確認しながら、それに合わせて十分な時間を割くよう配慮する必要があったものと思われる。これらの点を踏まえ、来年度は、資料および説明の際の工夫を考えていきたい。今年度の受講生の人数と教室の収容能力がほとんどぎりぎりの状態であったため、授業が窮屈な印象を与えてしまったようである。今後これ以上人数が増加するようであれば、教室を変更する必要があると思われる。

足立 浩平
多変量データ科学
本授業のように、難解に思える数学を基礎にした学問については、「わからなくても気にしない」ことが大切です。「わかっていない」と思っているも、解析手法を使う場面になって、「結構理解できていた」ことに気づくことがあります。
行動データ科学特講 I
人間科学の諸分野では、多変量統計解析を使用する場面は多く、また、統計解析の考え方を自身の分野の理論構成に使うことがあるかもしれません。数学的な詳細は理解できなくても構わないので、分析法の背後にある考え方を、大まかにつかむことが肝心と思えます。

臼井 伸之介
リスク心理学
受講生 64 名中、回答者が 17 名とアンケート回答者が全体の約 4 分の 1 であったことがまず残念だった。回答結果としては、およそ各問において 4（まあ～思う）と 5（非常に～思う）を合わせると 90%近い値であったので、それなりに評価は高かったように思う（昨年度は 3 も結構多かったのだ）。特に問題点の指摘はなかったが、自身で振り返るに、もう少し受講生参加型の授業にしてもよかったかな、と思うので、その点次年度の課題としたい。

老松 克博
臨床心理学特講Ⅱ
回答数が少ないので評価がはっきり把握できませんが、肯定的なものから否定的なものまで幅があるように思われますので、その理由を検討して次年度に活かすようにします。

大谷 順子
地域研究特講
今年度は大学院生各自の研究課題に役に立つ機会になるように心がけた内容にしたいというのが反映できていたようでよかったです。もう少し質問の時間も多くとれるようにしたいと思います。
現代社会を読み解く(共通教育系科目)
いろいろな学部から異なる専攻や興味のある学生たちを対象に講義を行うとき焦点の当て方にも苦労しますが、全般的に皆さんが興味を持ってくださったようでいろいろ準備をしたり工夫をした甲斐がありました。来年もさらに改善を試みたいと思います。

芋阪 満里子
心と脳の科学特講Ⅰ・認知脳心理学
理解できたというコメントの一方、難しかったというコメントもあった。また、非常に興味を持てたというコメントがあったが、配布資料が必要とコメントがあったので、今後はできるだけ配布して理解を高めるようにしたい。

小野田 正利
学校経営学
この授業科目は、隔年開講で実施し、かつ2コマ続き(180分)でおこなっているため、計8回分を12月中旬までに終えてしまうことで、受講者約70名のうち24名の回答しかなかった。ただ評価は極めて高いので、結果には授業実施者の狙いが十分伝わっていたと感じる。耐震工事のために、教室が窮屈であった。

金澤 忠博
比較発達行動学
月曜1限の授業であったにもかかわらず多くの受講生が受けてくれてやりがいがありました。毎回感想や質問を書いてもらいましたが、良質の考えさせる質問も多く、次の講義の冒頭で回答するのを楽しみました。今後も期待します。新しい知見をさらに加え内容を refine していきたいと思います。
臨床発達心理学の基礎(共通教育系科目)
回答者は10名中1名でしたが、概ね授業中に毎回書いてもらった感想の通りの内容でした。受講者は発達臨床のケースに関わっている人が多く、日頃のケースに役立ってくれることを望んで授業を構成しました。

河森 正人
動態地域論Ⅱ・動態地域論特講Ⅱ
毎回の授業の最後に提出してもらおうリアクションペーパーについて、貴重な指摘を受けた。リアクションペーパーに対するリアクション（コメント）をもっと充実させるよう工夫したい。

吉川 徹
経験社会学
適切な授業評価をいただいている。授業の性質上、全員がとても満足する内容にするのは難しいが、結果を真摯に受け止め、来年度以降の教育に役立てたい。

木村 涼子
生涯教育学
アンケート結果をみたところ、授業に満足してくれている受講生が多かったので、意欲をもってもらえる授業をと努力したことが、ある程度成功してよかったと感じました。授業の最初に、前回の復習とともに、前回提出してもらったレポートの一部を紹介するようにしていたが、アンケートの自由記述として、他の学生の意見を知ることができてよかったという意見があり、学生相互の意見交流のきっかけとするというねらいが達成されていたとすれば、何よりだと感じました。受講生が相互に考えを知り、視野を広げる機会をつくるために、今後、さらに方法を工夫していきたいと思います。ただ、学部生と修士課程の大学院生合同の講義授業であるので、授業内容の難易度を設定することに課題が残ると思います。
生涯教育学特講
アンケート結果をみたところ、授業に満足してくれている受講生が多かったので、意欲をもってもらえる授業をと努力したことが、ある程度成功してよかったと感じました。授業の最初に、前回の復習とともに、前回提出してもらったレポートの一部を紹介するようにしていたが、アンケートの自由記述として、他の学生の意見を知ることができてよかったという意見があり、学生相互の意見交流のきっかけとするというねらいが達成されていたとすれば、何よりだと感じました。受講生が相互に考えを知り、視野を広げる機会をつくるために、今後、さらに方法を工夫していきたいと思います。ただ、学部生と修士課程の大学院生合同の講義授業であるので、授業内容の難易度を設定することに課題が残ると思います。特に大学院生にとって、わかりやすすぎる内容にとどまっていないかを検討すべきだと考えています。

熊倉 博雄
生物人類学
シラバスがあまり参考にならなかったというのは、シラバスの書き方が悪いのかもしれませんが。もう少し丁寧に書くようにします。予習・復習はほとんどやっていただけていませんが、これは講義の形式に改善の余地があるのかとは思っています。ただ、理系の人類学の基礎なので、解説しなくてはならない部分が多いということをご理解いただきたいと思います。

小泉 潤二
人間と文化・人間と文化特講
アンケートに回答した学生が受講者の半数以下であり、またアンケート回答者の中にはほとんど出席しないで回答している者が含まれているため、正確なところはわからない。しかし、全体として高い評価を受けている。受講者数が多く難しいところはあったが、今年度は参加型の授業を試みた。人類学的記録映像を見た後、グループごとにディスカッションをした上で、その結果をグループごとに発表し、またグループに戻ってディスカッションするということを続けるようにした。ディスカッションに取れる時間が足りなかったが、ディスカッションの中で気づくことがたいへん多かったと学生は報告している。最終レポートを見ると、ほとんどの学生が私の最も伝えたかったことをたいへんよく理解しているので、授業の成果はあったと思われる。すべての記録映像が英語だったので、理解するのがたいへんだったと思うが、時間があればそれぞれの作品についてよりわかりやすく説明できたはずだし、質問を受ける時間を多くすることもできたはずである。
近藤 博之
教育と社会
同じ学科目の所属でも興味を持ってくれた人とそうでない人とがあり、受講者全体の関心を満足させるのはなかなか難しいと改めて感じました。ディスカッションを取り入れるなどして、できるだけ工夫していきたいと思います。
斉藤 弥生
比較福祉論 I・比較福祉論特講 I
30人程度の受講者で熱心に話を聞いてくれたので、講義がしやすかった。最終回には実際に福祉の現場（特例子会社）で働く卒業生が障害者雇用の話をするという機会を持つことができ、特に3回生には好評だった。
佐々木 淳
臨床心理学 I
アンケート結果を拝見して、教育目標に対して一定の成果があったように思い安心しました。臨床心理学 I は学問の基礎的な内容を含むものですが、これからも、ワークなど体験的学習も含めつつ構成していこうと思います。
佐藤 眞一
心理学測定(基礎科目)
行動学系の教員が研究領域ごとに分担しているオムニバス形式の実習も含む3コマ連続の授業のため、学生ごとの興味や関心が異なることや長時間の集中困難などによる否定的な回答も予想していましたが、おおむねポジティブな回答結果だと判断します。予習・復習をしたという回答が少なかった点は、今後の改善点かと思います。また、3コマ連続の時間の使い方等については、

担当者間で検討の余地があると考えています。
臨床死生学・老年行動学
研究分野の教員が内容を分担してオムニバス形式で行う講義のため、教員間で講義内容に重複がないように工夫しています。アンケート結果は非常に好意的だったと感じます。今後も、研究の進展の速い分野だけに、今後も講義内容に工夫をこらしていきたいと思います。予習復習を課すことがほとんどないので、今後の検討課題と考えます。
臨床死生学・老年行動学特講Ⅱ
大学院生の回答ですが、回答者が3名と少なかったため、結果をそのまま受け入れることは難しいかもしれませんが、内容の適切さなど多くは一致して好意的な回答でした。予習・復習に関しては、三者三様だったので、受講者側の講義への興味に違いがあったと考えます。
心理・行動科学入門(共通教育系科目)
100名を超す大教室の概論の講義を2名の教員によって異なる内容の講義を行いました。大講義室の授業でしたが、私の授業ではほとんど私語もなく、出席率も高く、やりやすく感じました。アンケート結果はおおむね好意的な回答でしたが、学生とのコミュニケーションの不足と予習・復習の不足が明らかになりました。大講義室の授業であることと、他専攻の概論の授業のため困難な面はあるのですが、多少なりともディスカッションの機会を設けたり、予習・復習の課題を課すことも必要かと考えています。

澤村 信英
国際協力学Ⅱ・国際協力学特講Ⅱ
英語で行っていること、ケニアなどのアフリカ諸国でのフィールド調査結果を題材に使っているなど、留学生や研究に関心を持つ大学院生中心の授業となっていた。英語での授業にチャレンジする学部受講生に対する配慮が不足しており、この点はもう少し工夫しなければならなかった。

三宮 真智子
教育コミュニケーション学Ⅰ・教育コミュニケーション学特講Ⅰ
教育コミュニケーション学特講Ⅰについては良好な結果であり、また受講生の態度にも問題はなかった。ただ、予習・復習の時間が思いの外少なかったことが判明し、これが問題として残る。教育コミュニケーション学Ⅰについては、不可解な回答が含まれていたものの（たとえば、「シラバスを読んでいない」との回答があったが、授業開始時のみならず単位申請者全員に対し再度シラバス資料を配付し説明を加えている）、概ね良好な結果であった。ただし、学部生・院生を併せると、授業内容の難易度評価にバラツキが見られた。これには、既習事項および意欲・理解力等の差が反映されていると考えられる。結果を踏まえ、来年度は次の点を改善する。(1) ガイダンスをより念入りに行い、シラバスの理解を徹底させる。(2) 授業内容の多くを既習している学生および前提となる知識の欠落が大きすぎる学生には適切な助言を与える。(3) 家庭学習用の課題をさらに増やす。

篠原 一光
適応認知行動学・適応認知行動学特講 I
配布資料の作り方について、ページを振ってほしい、動画等の参照先を示してほしいというコメントがあったが、いずれも改善するようにしたい。また、今年度の講義として配慮した点として講義内容を詰め込みすぎず、なるべく多くの説明材料を取り上げるようにして興味を持ってもらえるように工夫するということがあった。そのため、受講生の理解をより確実なものにすることはできたと思うが、その一方で予定していた内容をすべて取り上げることはできず、またある意味講義としてのまとまりに欠けがちになるという問題が生じたと考えている。講義の情報量とわかりやすさのバランスをとることはなかなか難しいが、受講生に予習をしてもらうことで改善できると思われる。またアンケート結果からも予習してきた受講生は少なく、この点は問題であると思われるので、受講生が何らかの予習をするよう方向づけるような工夫を今後したいと考えている。

志村 剛
行動生理学・行動生理学特講 II
アンケート回答者が受講者の1/3程度であり、全体的な意見とはいえ面もあるが、授業内容には大半の学生が興味を持ってくれたようだ。授業のはじめにも触れたように、「広く浅く」を心がけているので、やや散漫な印象となった可能性がある。授業中に質問がしやすいように出来るだけ配慮しているが、残念ながら今semesterも一方通行の授業となってしまった点を次年度以降の授業改善に役立てたい。

園山 大祐
比較教育制度学
回答ありがとうございます。成績評価については、オリテンおよび12月に2回、1月1回お話をしました。ノートの取り方についてもその時に説明をしています。テキストも指定されていて、プリントの穴埋めはテキストを読んだ者にとっては退屈な作業でしょう。とはいえ、聞きながらメモをとることで内容も整理されます。また講義ノートの作成は論文の整理のためには必要な作業です。試験にノートを持ち込みを認めたため時間は70分と短くしました。授業準備に2時間を設定していますので、アンケートの結果からも不十分な学生が多くみられます。逆に試験の結果においては、講義ノートが整理されていた学生はほぼ満点です。出席については加点評価のみに利用すると説明しました。

高田 一宏
教育環境学概論(基礎科目)
全体としてはおおむね良好といってよい結果である。ただ、回答者が約30人と少なかった。依頼をもっときちんとすればよかったと思う。また、200人規模の大教室だったためか、板書やプレゼンテーションの文字が読みにくいという意見があった。今後は気をつけたい。

教育文化学
かなり高い評価をいただいているが、問7、12の結果から受講生の関心への対応は十分ではなかったといえる。毎回の授業でコメントや質問を提出してもらい、次の回ではそれらにこたえるようにしたが、復習・発展学習を促したり話し合いを取り入れるなどの工夫も考えたい。
コミュニティ教育学
第6セメスター開講のため、例年、途中で受講しなくなる学生が多い。ただし、最後まで受講してくれた学生はとても意欲的である。アンケートでは、難易度、理解度、関心への対応など、かなり高い評価をいただいた。だが、予習・復習を促す授業になっていなかったのは反省すべき点である。今後、参考文献の紹介や自主学習の手引きなどについて、工夫したい。
千葉 泉
実践的文化交流Ⅱ
毎週の予習・復習の時間について、受講生の33%が「全くやらなかった」と答えているので、来年度は、受講生がより積極的に予習・復習に向かうことを促進するような工夫をしたい。
辻 大介
コミュニケーション社会学
履修登録80名超で毎回60名以上が出席していた講義にしては、アンケートにお答えいただいたのが22名と少ないのですが、「全体として良い授業だったか」についての評価は平均値4.86ととても高く、うれしく思います。「コメントシートが毎回あればよかった」というご意見をいただきましたので、来年度はもう少し増やすことにします。その代わりというわけでもないのですが、今年度は最後の授業で試しに期末レポートのフィードバックを試してみました。成績評価の決まった後である上に、2月18日と日も遅く、しかも天気も悪かったので、出席する人がいないんじゃないかと少し心配でしたが、20名弱が集まってくれました。たぶん、このあたりの20名前後という数値が私の講義のコアなファン層(?)なのだと思います(笑)
堤 修三
社会保障政策論Ⅱ・社会保障政策論特講Ⅱ
概ね予想通りのアンケート結果だと思う。
中澤 涉
教育社会学・教育社会学特講
配布資料の文字が小さいというコメントが多かったようなので、その部分のスライドは拡大したものを配布するなどの対応をとるようにしたい。
中道 正之
霊長類心理学
対話型授業を心掛けたが、十分には達成できなかった。その理由として、適切な質問ができていなかったように思う。これが改善点であると思う。しかし、多くの受講生から多様な意見を聞く

ことができたのは、大変良かった。私自身の研究のアイデアとして使わせてもらいたいコメントもあった。積極的に手を挙げて、意見を言っていた受講生だけでなく、受講生の意見にうなずきなどで答えてくれた多くの受講生にもありがたく思う。積極的な授業参加の有り様をさらに、考えたい。さらに、予習・復習する人がほとんどいなかったということも、反省点。授業内容に関連する書物を自発的に読んでもらえるような授業にしなければならないとも感じている。

比較行動学特講Ⅱ

コメントいただいた院生の皆さんが、よい授業と評価していただき、うれしく思います。院生や学部生の皆さんの積極的な発言のおかげで、私も考えながら、楽しく授業を進めることができました。院生の皆さんの研究領域と関連させながら、意見交換できるような授業も目指したいと思っています。

中村 安秀

医療通訳とコミュニティ

オムニバス形式の講義ですが、「医療通訳と関連した多岐の項目の授業がそれぞれの専門の講師の方々によって進められ」興味深い授業内容だったという意見をいただいた。オムニバス形式の講師は医療通訳士協会などで顔を合わす機会が多く、講師同士のふだんからの交流が講義の底流を形成していることを、アンケートから教えられた。来年度も、本年度の質を維持して進めたい。

中山 康雄

認知システム論・認知システム論特講

今回のアンケート結果は、自分の基準からすると、まずまずであった。筆記試験の答案からも推測できるが、講義の内容を学生たちの状況と結び付けてある程度説明できたのではないかと思っている。

西森 年寿

教育工学Ⅰ・教育工学特講Ⅱ

アンケートへの協力ありがとうございます。概ね高い評価をいただけていると理解します。現在の授業の方向性を洗練させ、より学びが深まるように工夫していきたいと思っています。

服部 憲児

高等教育論特講

回答者が1名のため、どうコメントしたら良いか難しいです。その回答から判断するに、全体的に興味を持って取り組んでもらえる内容を提供できたのかと思います。シラバス通りに進められなかったとする点は、少人数であったので、授業内での議論の流れや、受講者の関心に合わせて内容を調整したためだと思っています。受講生と相談しながら行ったので、批判票ではないと理解しています。

檜垣 立哉
現代思想論・現代思想論特講
難しいとか理解しにくいとかが多い割に興味ももてたという回答も多いので、哲学の授業としてはまあまあ標準的かなとおもった。今回はパワポを多用したが今後はこれに動画とかいれてなんとかできないかともおもう。ただ大人数だったので、小レポートの返しとかコメントとか限界があった。もう少し人数が少ないとインタラクティブにできるのにおもう。

福岡 まどか
実践的文化交流Ⅱ
この授業では、ワークショップ形式により実技の習得を中心として楽器演奏や舞踊について学ぶことを目指しています。今年度の授業でも受講生の皆さんは大変 熱心に興味を持って授業に取り組んでくれたと思います。授業中に提出されたコメントなどを参考にしながら、教材や授業の進め方については来年度に向けてさらに改善していけるように考えたいと思います。

藤岡 淳子
教育心理学Ⅰ
スライドの配布資料については、あえて配布しませんでした。来期再考します。教室の大きさに関しては、通常はちょうどよいくらいなのに、試験の時だけ満杯になりました。アンケートでは、ほとんどの人がほとんど出席していると記入しているのに不思議です。アンケートに記入していない人が、日ごろ欠席をしているということなののでしょうか？

藤川 信夫
教育人間学Ⅰ・教育人間学特講Ⅱ
講義の内容については、他の研究分野の授業とは異なり、対象と方法が明確に定まっているわけではなく、多様な対象や方法の設定の在り方を探究していくという分野の性格があるため、とくに学部学生にとっては講義全体の意図が不明瞭であるという印象を与えたのではないかと思う。また、教育学系全体のカリキュラム構成として、教育学の基礎を扱う教育哲学や教育思想史等の科目が欠如しており、これを補うために第1学期に「教育人間学」本体よりもむしろ、教育思想史に重点を置いた講義を行った（教育人間学Ⅱ・教育人間学特講Ⅰ）点にも問題があると思われる。 レポートの出題については、課題の提示等を早めるなどの工夫をすべきであると反省している。

牟田 和恵
ジェンダー論・ジェンダー論特講
授業内容への満足度はおおむね高かったようで、嬉しく思っている。今後も受講生の関心が持てる授業内容となるよう、引き続き努力していきたい。あわせて、受講生が授業の準備をすることで学習機会が増えるよう、授業内容を工夫していきたい。

森川 和則

基礎心理学

全般的に評価は非常に良かったと言えるでしょう。授業難易度は95%が適切と答え、「13：この授業は全体として良い授業だったと思いますか？」には80%が「非常に良かった」20%が「まあ良かった」と答えているので、好評だったと思います。自由記述の唯一の要望として「5限ではなく、もっと早い時間にしてもらえるとありがたかった」とあります。可能かどうか検討してみます。早い時間帯は教室が混んでいるので難しいかもしれません。せっかく質問時間を設けたので、もっと積極的に質問してほしいです。